

東雲

真理の道
誠の道
平和の道



平戸市立度島小中学校
学校だより NO.6
令和8年6月26日
文責:校長 高田 敦

二人とも立派でした！

6月21日（日）平戸市文化センターにおいて、第21回平戸市「少年の主張」大会が開催されました。本校からは、小学6年生 ○○ ○○さん、中学3年生 ○○ ○○さんが出場しました。



緊張する場面で、しっかりと話す、伝える2人の姿は大変立派でした。2人とも原稿作成から、スピーチ練習まで多くの時間を費やし努力を重ね、つらいこともあったかと思いますが。

そして今回、このような大きな舞台で話すという、貴重な体験をすることができました。参加した2人にしか経験できない一生モノ、まさに「やったもん勝ち」です。ここで得た自信を次につなげていってくれるものと期待しております。



スピーチ原稿を裏面に載せています。度島愛、家族愛に溢れ、今、まさに起きている社会課題について自分の考えを述べた内容です。ご一読ください。（文字が小さくてすみません）

参観ありがとうございました

「度島っ子の心を見つめる教育週間」での道徳授業、お子様の学習の様子はいかがでしたか。道徳は、個々の価値観がぶつかり、揺さぶられ、大人も子供も一緒に考えることができる時間です。お子様が真剣に考える姿が見られたのなら、それでもう、100点です！

今後の学校スケジュール

○7月2日（木）保育所職場体験（中3家庭科）

○○主任、保育所の先生方、お世話になります！

○7月9日（木）学校支援会議

委員の皆様（区長さん、○会長、○○まち協理事長、立願寺 ○○住職）お待ちしております。

○7月16日（木）学校保健委員会

○○○学校医、○○学校歯科医、○○薬剤師、○会長、○○副会長、本校保健委員のみなさま、よろしく願いいたします。

校長室より ～立ち止まる、見つめる、愛おしむ～「教育週間」に寄せて～

今から20年以上前のことではありますが、「長崎市男児誘拐殺害」「佐世保・小6同級生殺害」この2つの出来事は、教員としていまだに深く心に残っています。

当時、「長崎の子供は大丈夫か」「もっと心の教育をすべき」など深刻な社会の問題としてつきつけられました。長崎市の事件に関しては、私は新採2年目、長崎市立伊良林小勤務で、事件現場、県警にも近かったので、マスコミの多さや世間のよどんだ空気から、事の大きさを肌で感じていました。

その後、長崎県すべての公立小中学校において、教育週間がはじまりました。きっかけは2つの出来事ですが、今の教育週間では、学力だけでなく人としての心（道徳・人権・平和意識）を育てることを大きな目的としています。子どもたちの心を育てる教育週間だからこそ、大人である私たちも、自分の心を見つめ直したいものです。

偉そうなことを言っている私ですが、振り返ると、自分が子育て真っ最中の時代は、日々の多忙さで心を見つめるどころか、我が子の気持ちなんて考える余裕もありませんでした。仕事と子育てにアップアップで、「何のために働いているんだろう」と悩んだものです。そんな時、次男が通っている中学高校の校長からいただいた言葉が心に刺さりました。

「身を裂く痛みに咲く花を 愛といいます」

ぜひ、この機会に改めて「何のために子育てをしているのか」もっと言いますと、保護者の方ご自身が「自分は何のために生きているのか」立ち止まって心を見つめてもいいかもしれません。きっと、「子供のため」そして、ご子息へのゆるぎない、この上ない愛情を再確認すると思います。



平戸港からフェリーで30分ほどの場所に度島という小さな島があります。人口約520人、主な産業は漁業と農業で、おいしい魚と豊かな自然が自慢の島です。特に、島から見える海は、太陽の光を反射して美しく輝きます。私はそんな心癒される度島の海が大好きです。

しかし、一見きれいに見える海にも問題があります。それは海のゴミ、「海洋ゴミ」です。みなさんは、海のゴミが三つに分けられることを知っていますか。海を漂う「漂流ゴミ」、漂ったゴミが海岸に流れ着いた「漂着ゴミ」、そして海底に沈んで堆積する「海底ゴミ」です。その中でも、度島で特に問題となっているのが「漂着ゴミ」です。海岸へ行くと、ペットボトルや発泡スチロールなど、たくさんのゴミが流れ着いています。海洋ゴミの多くは、自然界で分解されにくいプラスチックです。そのため、長い間海に残り続け、海の生き物や自然環境に大きな影響を与えています。世界では、年間約800万トンもの海洋プラスチックゴミが発生していると言われています。私は、海と共に暮らしてきたからこそ、この問題を身近に感じています。

夏になると、島の子どもたちは海に泳ぎに行くのですが、波と一緒にゴミが流れてくることがあります。「最初から海が汚れていたのではないか」と思う人もいるかもしれません。しかし、それは違います。度島では、地区の方々が、私たちが海で遊ぶ前に海岸清掃をしてくださっているからです。また、父や弟たちと釣りをしていた時には、魚ではなく、コンビニの袋や古い長靴が釣れたこともあります。次々に流れ着くゴミを見て、私は、「なんでこんなに度島の海にゴミが流れてくるのだろう」と疑問に思っていました。本来なら魚が泳いでいるはずの海に、ゴミが流れている。その光景を見るたびに、私は、「本当はもっときれいな海のはずなのに」と悲しい気持ちになります。

小学五年生の時、波息の鼻という場所で清掃活動を行ったことがありました。14人で2時間かけて拾った結果、燃えるゴミだけで36袋、約100キログラムものゴミが集まりました。私は、その量の多さに言葉を失いました。さらに驚いたのは、ゴミの種類の多さです。外国語で書かれたお菓子の袋やペットボトルなど、島の外から流れ着いたと思われるゴミが数多くありました。そこで、このゴミの問題は度島だけのものではないことに気づきました。

捨てられたゴミは、潮の流れに乗って、遠く離れた別の海へ流れていきます。そして、その海で暮らしている人たちが、生き物たちを苦しめてしまいます。海はつながっています。だからこそ、自分が捨てたゴミは、「自分には関係ない場所」を汚してしまうかもしれないのです。私は、度島の海を見て、そのことを実感しました。だから今、必要なのは、「誰かがやってくれる」のを待つことではなく、一人一人がアクションを起こすことだと思います。例えば、レジ袋ではなくマイバッグを使うこと。ゴミをきちんと分別すること。海岸清掃に参加すること。一つ一つは小さな行動かもしれませんが、しかし、その小さな行動が増えれば、海を守る大きな力になると私は思います。実際に海岸清掃へ参加したことで、私は海洋ゴミ問題を「ニュースの中の話」ではなく、「自分自身の問題」として考えるようになりました。だからこそ、もっと多くの人に、海で起きている現実を知ってほしいです。

私は、これからも度島の海を守っていきたいです。キラキラと輝く海を、未来にも残したい。そのために、まずは自分自身がアクションを起こしていきます。小さな離島である度島から始まる行動でも、海は世界につながっています。一人一人の小さなアクションが、未来の海を変えていく。明日からではなく、今日から、今この瞬間から、何が出来るか考えてみませんか。

皆さんは、今この瞬間も世界で戦争や紛争が続いていることを知っていますか。ニュースから流れてくるウクライナの戦争や中東での激しい対立の様子を、皆さんも一度は目にしたことがあると思います。

数ヶ月前、僕は「ホルムズ海峡が封鎖された」という報道を目にしました。その時の僕は、「また遠い外国で争いが始まったんだな」と他人事に感じていました。平和な日本にいる僕には関係のないことだと思い、あまり興味をもてずにいたのです。

しかし、ニュースを見ていた時、家族の会話から衝撃の事実を知ることになりました。

僕の父は、船乗りです。一度仕事に出ると何ヶ月も家を離れ、大きな船に乗って外国へ石油を積みに行き、日本へと運ぶ仕事をしています。父の会社の船も、まさにその時ペルシャ湾にいました。海峡が封鎖されたために、二ヶ月半もの間、日本に帰ってくることができませんでした。

「お父さんも乗っていた可能性がある。もし、あの船に僕のお父さんが乗っていたら……」

そう考えた瞬間、全身に強い不安と恐怖しさが走りました。今回は運良く乗っていませんでしたが、父が巻き込まれていた可能性は十分にありました。他人事だと思っていた世界の争いが、実は僕のすぐ目の前にある、大切な家族の命に関係していたのだと分かりました。世界で起きていることを知らないこと、無関心であることは、なんて怖いことなのだろうと身に染みて痛感したのです。

このことをきっかけに、僕はなぜホルムズ海峡が封鎖されたのかを調べました。そこには、アメリカやイスラエル、イランといった国々の複雑な対立や、過去の戦争の歴史、そして「核開発」の問題が深く絡み合っていることが分かりました。

僕は昨年、修学旅行で長崎の原爆資料館に行きました。核兵器がどれほど恐ろしく、人間の命を無差別に奪うものかを学びました。「国を守るため」というそれぞれの言い分はあるのかもしれませんが、しかし、そんな恐ろしい兵器で脅し合い、一般の人の生活を危険にさらしてまで行う正義など、本当にあるのでしょうか。お互いに傷つけ合うのではなく、国同士が話し合って解決する方法は本当にないのだろうか、強い疑問を感じました。

世界の争いは、僕たちの暮らしにも直接つながっています。身近なところでは、ガソリン代だけでなく、毎日学校で使っている文房具のプラスチック、お菓子や野菜など、あらゆるものの価格が上がっています。日本はたくさんの資源を外国からの輸入に頼っているからです。このまま物価が上がり続けると、将来の僕たちは必要なものも買えなくなってしまうかもしれません。

戦争のなくなった平和な日本で育ち、何不自由なく生活できること。学校に行って友達と笑い合い、大好きなサッカーに熱中できること。これらは決して「当たり前」ではないのだと、改めて気づきました。僕たちが幸せな毎日を送る裏で、今この瞬間も、爆撃の音に怯え、大切な家族を失い、涙を流して暮らしている人たちが世界には確実にいるのです。

戦争はいけないことだと、世界中の誰もが分かっているはずですが。世界を動かすような大きな戦争を止めるために、僕たち小学生一人ひとりにできることは、とても小さいかもしれません。

それでも、僕は諦めたくありません。相手の立場に立って言葉をかけること。意見や文化の違いを認め合うこと。そして、争いよりも「話し合い」を選ぶこと。これらは、今の僕たちの学校生活の中で、すぐにも始められる平和への第一歩です。

これからも僕は、世界や日本で何が起きているかに関心を持ち続け、戦争で苦しんでいる人の存在を絶対に忘れません。自分にできる身近な行動を、まずやってみようと思います。日本だけでなく、世界中のみんなが恐怖を忘れ、笑顔であふれて暮らせる平和な日が来ることを、僕は心から願っています。